



# ブラインドの向こうに見える光

学研『スポーツ感動物語』

こぼれ しょうかい  
小林 良介

生まれつき左目の視力がなく、15歳の時に右目も失明し全盲となった河合純一。しかし、決してその夢は諦めることがなかった。5歳で始めた水泳では、17歳の時にパラリンピックに出場以来、5大会連続で出場し、金5個、銀9個、銅7個の計21個ものメダルを獲得する。一方、教師になるという夢もかなえ、大学卒業後には母校の舞阪中学に赴任。なりたい自分を思い描き、いつもそれに向かって歩み続けた河合。前例のない生き方で自らの道を切り開いてきた、その半生を追う。

## 全盲のスイマー、世界へ

4年に1度開催されるスポーツの祭典、オリンピック。そしてこの大会の直後には、パラリンピックが行われることを知っている人も多いだろう。パラリンピックとは、体に何らかの障害を持ったアスリートによるオリンピックだ。車椅子に乗った選手同士で戦うバスケや、片手や片足を亡くした人によって競われる陸上競技、さらには全身麻痺の選手が参加する種目などもある。それらに共通しているのは、選手たちはみな、なんらかのハンディキャップをもちているということだけではない。オリンピックと同様に、選手たちはみな自国の厳しい予選を勝ち抜き、たゆまぬ努力によってこの大舞台に登ってきたトップアスリートであるということだ。その競技レベルは回を重ねるごとに高くなり、それはもはやハビリテーションの一環などではなく、完全に競技スポーツの域。

例えば自らの足を失い義足を履いた選手が、100メートルを10～11秒ほどのタイムで一斉に走り抜けていく様子を一度でも見たならば、誰もこの大会がトップアスリートの集まりであることを実感するに違いない。

これらの種目の中には、もちろん水泳もある。そして、日本の河合純一が初めてこのパラリンピックの水泳に出場したのは1992年バルセロナ大会だ。河合が出場したこのカテゴリーは「ブラインド」。つまり河合は、全く目が見えない全盲の選手なのだ。

## 徐々に失われていく視力

河合は静岡県舞阪町で生まれた。先天性ブドウ膜欠損症という病気により、赤ん坊の頃から左の目は全く視力がなく、右目もまた同様であった。3歳の時に手術を受け、右目だけは0.1の視力を取り戻したが、その目もまた何も見えなくなると、医者は河合の母親に伝えていた。

元々水泳の盛んなこの地方で、泳ぐことが大好きだった河合は5歳の時からスイミングスクールに通い始めた。小学5年生の時には6年生よりも早いタイムを出し、小学校の代表として地区大会に出場し、1位になった。6年生の時もまた河合は1位になった。水泳が大好きで、誰よりも速く泳ぎ、元気いっぱい育つ河合少年。その夢は、学校の先生になることだった。

しかし、このころから河合は自分の目が悪くなっていることを感じていた。中学1年生になった時はますます泳ぐことも難しくなっていた。プールの底に書いてあるラインが見えず、腕はコースロープですり傷だらけになってしまった。また、目の前の壁も見えず、ターンのタイミングも分からないため、頭かぶつかり血を流したこともあった。

そんな河合を支えたのは、弟、友人、そして先生たちだった。学校へは弟が背中に手をあてて通学し、帰り道は友達が自転車の後ろに乗せて自宅まで送ってくれた。教科書も見えなくなった河合は、授業に全ての神経を集中させた。やがて自分の目が完全に見えなくなると、河合は知っていた。しかし、勉強や水泳、友達との遊びなど、毎日やるのがたくさんあり、将来に絶望的になって悩んでいるひまは全くなかった。驚くべきことに、「失明」に対する恐怖は、彼にはなかったのだ。

その前向きな強さは、それからの河合の人生を大きく切り開いていくことになる。

## 東京の盲学校への進学

中学3年生になった時、とうとう河合の目は完全に物を見ることができなくなってしまった。太陽の明るさを感じることはできるが、部屋の明かりがついているのかどうか分からないほどに。しかし、水泳部の顧問の先生は河合に言った。

「何回水をかいたら壁が来るのか、体で覚えるんだ。水泳を続けたいのなら、努力でそれをつかめるようになるまで練習するんだ」

必死に泳いでいる最中にそんな無理なこと言うなよ、と河合は思った。とはいえ全力で泳ぎながら壁に向かって頭から激突するのは、本当に痛かった。痛くないようにするためにはスピード落とすしかない。しかし競技者としての覚悟、そんなことはできるはずなかった。頭をぶつけた痛みが「ストロークの数で覚えるしかないだろう」と河合に言った。顧問の先生とこの痛みをコーチにして、ブラインドとなった河合は水泳の技術を磨き続けたのだ。

水泳部の仲間、壁に当たっても痛くないよう河合が泳ぐコースの壁にタオルを何枚も貼り付けてくれた。そして河合は中学校の県大会決勝にまで進み、この年9位に入賞したのだ。

もうすぐ中学校を卒業するにあたり、河合は小学校の頃からの夢である先生を目指すために東京の盲学校に進むことを決めた。先生になるために、大学に行くことが必要だ。そのためには、大学に進学できるだけのレベルを持った高校に入らなくてはならない、東京行きは、そのためだけの選択だ。夢がはっきりしていることで、それに向かうためのプロセスを、河合ははっきりと描くことができた。

しかし、その入試は点字で行われる。中学3年生で全盲になった河合は、点字を読むことができない。担任の先生は静岡から東京に足を運び、筑波大学附属盲学校の先生に河合のことを伝えた。点字は読めないが、抜群の記憶力を持っていること。勉強にも熱心で、水泳は果でも10本の指に入るほどの実力を持っていること。それを聞き、盲学校の先生は河合の口頭での入手を認めてくれたのだ。

合格すれば、河合は住み慣れた舞阪の街を離れることになる。通い慣れた学校までの道や、どこにどんな家具が置いてあるかが分かっている家も、目の代わりになってくれる弟も友人もいない、東京に行くことになるのだ。

## 目が見えないという障害は個性だ

不安が全くなかったわけではない。しかし自分がこうしたいという目標がある限り、それを達成するまでに予想できる苦勞や困難は必ずあるものだ。それなくして達成もありえないと分かっていた河合は、東京に行き、水泳を続けながら学校の先生になることを目指した。自分の人生は自分で決めて、自分で歩いて行くものだ、と中学3年生の河合は知っていたのだ。

河合は、難関といわれた筑波大学附属盲学校に合格した。そこで河合は、通常の勉強に加えて、点字や、目の見え方が使う白杖の使い方を学んだ。点字が読めるようになれば、様々な本や教科書が読めるようになる。また白杖は、二歩先の情報を教えてくれる道具だ。これを使いこなせるようになれば、ひとりどこへでも出かけることができる。学校の敷地内にある寮で、上級生との新しい生活が始まった。

盲学校、点字、そして白杖。ここで河合は、いやでも自分が「障がい者」して見られることを自覚した。さらに、ひとりで町を歩くことができない。初めてのところばかりで道は分からない。どうしたらいいだろうと途方に暮れていたある日、河合にひとりで出かけなくてはならない用事ができた。タクシーに乗り、道を歩く人に目的地をたずね、結果的に河合は無事に目的地に着くことができたのだ。

「やれるじゃん、俺！」

河合は思った。知らない場所に行く道がわからなければ、見えている人だっけ人に聞くじゃないか。今見えてる人達だって、自分のように失明したらみんな人に聞くしかないじゃないか。なんだ、普通のことなんだ。人に聞くことは、恥ずかしいことじゃないんだ。この日を境に、障害は自分の個性なんだと思えるようになった。

一方、入学して間もなく河合の泳ぎを初めて見た、盲学校水泳部の顧問、寺西先生はそのあまりの早さに驚いた。その寺西先生の勧めで国体に出場すると、河合は視覚障害者部門の大会記録で優勝。さらに福岡で行われた日本選手権大会に進むと、ここでも河合は大会記録を出して優勝した。寺西天井の中に、ひとつの新たな目標が見えてきた。バルセロナで行われるパラリンピックに、河合が賞状をもらえるのか。しかもパラリンピックの水泳で、日本人が上位入賞したことはなかった。しかし、河合ならやれるのではない。寺西先生はどうしたら日本代表として出場できるのかを調べた。そして、その選考会であるジャパンパラリンピックで、河合は見事に優勝した。

バルセロナ行きの切符を手に入れたのだ。

## 銀メダルに感じた悔しさ

1992年、スペインのバルセロナでパラリンピック開幕した。高校2年生でこれに出場した河合は、自由形、背泳ぎなど6種目で銀メダル2つ、銅メダル3つを獲得した。国内の視覚障害者の中では、もはや敵なしと言っていいほどに速い河合だったが、世界のトップに立つことはできなかった。

水泳は5歳の頃からずっと続けてきた。辛い練習も乗り越えて、健常者の大会でも互角に戦ってきた。それなのに、同じ全盲で自分よりも速い選手がいたことが、河合は悔しかった。世界にはもっともっとすごい選手がいるということ、河合ははっきりと知らされたのだ。

その悔しさを晴らすには、同じ舞台で金メダルを取るしかない。4年後、アメリカのアトランタでのパラリンピックで金メダルを取る。河合は、そう心に誓った。

喜びと悔しさ。そしてもうひとつ、河合はこの大会で「疑問」も抱えることになる。

障害者のパラリンピックとオリンピックは、なぜこんなに違うのだろう。同じ国の代表でありながら、ユニフォームも違う。人々の注目度も違う。マスコミの数も、報道の大きさも全然違う。自分のことだけでなく、周囲のパラリンピックの選手たちががんばりや活躍を間近に見た河合は、オリンピックとの扱いの差に「何かおかしいんじゃないか」という、漠然とした思いを感じながら、帰国したのだ。

## 憧れの藤本選手との会話

盲学校を卒業した河合は、早稲田大学に進学した。大学の中で、全盲の学生は河合一人だけだった。授業中は展示でノートを取りながら、河合は勉強に励んだ。そして水泳部に入部。早稲田大学の水泳部は、過去、何人もオリンピックを送り出している名門だ。そんな人たちと同じプールで泳ぐということだけで、嬉しかった。そして入部して1ヶ月ほど経ったころ、河合に話しかけてくる人がいた。それは、オーストラリアの水泳留学から帰ってきた藤本隆宏選手だった。藤本選手は当時、400メートルの日本記録を持っており、ソウル、バルセロナと2度のオリンピック出場を果たしている、早稲田大学の先輩だ。日本のトップスイマーであり、河合にとっても憧れの選手である。

「オリンピックでの8位入賞、すごいですね」

河合が言うと、藤本選手は答えた。

「君は銀メダルを持っているんだろう。もっとすごいじゃないか」

この言葉に、河合は驚いた。

新聞の報道などでも、やはり健常者が上、障害者は下と見られていた中で、こんな風に考える人がいたのか。超一流選手の選手は、そういう物事の見方をするのか。日本のトップにいる選手が、こうした考え方を持っていることに、河合は感動を覚えた。

その後日本選手権などの大会で好成績を収めた河合は、1995年アトランタパラリンピックの出場資格を得た。とうとうバルセロナでの悔しさを晴らす時が来たのだ。

忘れ物を取りに行こう。

コーチとして河合の泳ぎをサポートしていた盲学校時代の恩師、寺西先生との合言葉だ。忘れ物。それは、取りそこねた金メダルのことである。

## ついに世界の頂点に

パラリンピックの競技としてのレベルは、大会ごとに高くなっていった。アトランタパラリンピックでは毎日2ケタを超える世界新記録が続出した。バルセロナのころに比べても、金メダルを取ることはさらに難しくなっていた。しかし河合は、それを上回るレベルアップを図っていたのだ。大会5日目100メートル自由形で、河合は顧問の金メダルを獲得した。

想像してみてほしい。真っ暗闇の中、真っ黒な水、真っ黒な壁に向かって頭から飛び込み、壁に向かって全力で泳いでみる自分の姿。手も足もすくむようなこの練習を、河合はひたすら繰り返して、そしてついに世界一になったのだ。

「これまで僕を応援してくれた人たちに対して、最高の笑顔で答えるのが今の僕にできることだと思うんです」

勝利後のインタビューにこう答えた河合は、その言葉通り最高の笑顔で表彰台の中央に立った。日の丸をつけたジャージーの上に、首から下げた金メダルが光っていた。

河合はこの大会で金2つ、銀と銅のメダルを1つずつ、計4つのメダルを獲得した。バルセロナでの忘れ物、金メダルを手に入れた河合は日本に帰国したのだ。

そしてその翌年、河合はもう一つの夢をかなえた。教員採用試験に合格したのだ。大学を卒業したあと、河合は母校である舞阪中学校に赴任した。

## 先生として、選手として

先生の仕事はまず、生徒の名前と顔を覚えることだ。河合は30名以上いるクラスの生徒全員の声をテープに録音して、繰り返し聞いた。声だけで、それが誰だかわかるようにならなくてはいけない。それだけでなく、150名の1年生、さらには420名の全校生徒の名前を、河合は覚えようとしていた。「担任の先生の目が見えないから生徒がちゃんとしなさいんだ」と言われることは、一番屈辱的なことだと感じていた。もちろん大変なことも多かったが、校内の移動に困る事はなかった。そこそこの3年間通った校舎であり、階級の段数まで覚えている。授業に遅れそうなきときは、それを駆け上ったりもした。

水泳部の顧問として指導しつつ、生徒の名前を徐々に覚えながら、河合はオーストラリアのシドニーで開催される次のパラリンピックのことが気になり始めていた。しかし、大学生だった頃は違い、練習する時間は河合には無かった。一日5時間以上泳いでいた練習は今、月に2～3度泳ぐのが精一杯になっていた。先生としての仕事をおろそかにすることは、絶対にできないことだ。

それでも、過去の実績から河合はシドニーパラリンピックの代表候補に選ばれていた。週末の合宿などに参加していた河合は、3たび、パラリンピックに出場するようになったのだ。生徒たちからはそれまでも「シドニーには出ないの?」と度々聞かれていた。その生徒たちに、自分が頑張っている姿を見せてあげたい。前回のアトランタでは金メダルが目標だったが、今回は自分の記録を破ることが目標になっていた。そんな姿を見せることで、生徒たちに伝えられることがある、と河合は感じていた。週末や夏休みを利用して、河合はまた体を作り上げていった。

自分のためではなく、今度は生徒たちのために。そして、自分を支えてくれる人たちのために、金メダルを取るんだ。

## さらなる高みを目指して

そして迎えた2000年。河合にとっては3度目のパラリンピック。日本からは17名の選手団が送り込まれ、河合は主将を務めた。大会中、生徒の1人からメールが届いた。

「金メダルを取れなかったら、教室に入れてあげない」

このメールに河合は苦笑しつつ、しかし体には力がみなぎってくるのを感じていた。

最初の種目、200メートル個人メドレーでは銀メダル。その後500メートル自由形、100メートル背泳ぎと銀が続ぎ、迎えた最終日。50メートル自由形と400メートルメドレーリレーで、河合は金メダルを獲得した。それだけでなく、個人種目決勝ではほとんどの自己ベスト記録を更新したのだ。生徒たちと交わした「全力で泳ぎきる」という約束を果たし、河合は舞阪中学校に帰ってきた。

そして、初めて自分の教え子達を送り出した春。卒業式の日に、河合には新たな気持ち芽生えていた。この子たちに自分は何ができたのだろう。生徒たちを前に、感謝と申し訳ない気持ちとで胸がいっぱいになり、涙が止まらなかった。そして舞阪中学校で5年の間、先生として勤務した河合は、より完璧な先生を目指して早稲田大学の大学院に入って勉強しなおすという道を選んだ。理想とする教師像に近づきたい。万能ではないけれど、万能になりたいという気持ちを忘れてはいけない。まだまだ自分には学習が足りない。もっと上を目指す以上、勉強するしかなく、そう思う今がやり時でもあると思った。

休職という形で動いていた学校を離れ、河合はさらに2年間勉強することを決めた。

目標を持ち、努力を重ね、パラリンピックでの金メダル、そして先生になるという2つの夢を叶えた。しかしそのことに満足して立ち止まることなく、河合は、さらに上を目指すことを決めたのだ。

もっと大きな先生となって返ってくるために。

## エピソード～河合純一のその後

2003年、河合の人生は「夢追いかけて」というタイトルで映画になり、全国の劇場で公開され、大きな反響を呼んだ。現在もこの映画は、多くの学校や施設などで上映されている。そして2004年、河合はアテネパラリンピックに出場。銅メダル2、銀メダル2、そして50メートル自由形では金メダルを獲得し、この種目でパラリンピック3連覇を果たした。2006年に結婚、そして一児の父となった2008年には、北京パラリンピックにも出場している。

また、これと前後してアジア地域の14～19歳までの若い選手を対象とした障害者スポーツの総合競技大会「アジアユースパラゲームズ」では、水泳チームの監督として若い選手の指導にあたる。さらに、パラリンピックに出場した選手によって構成された「日本パラリンピアンズ協会」会長に就任し、現在は「」として、パラリンピック選手をサポートする活動にも力を入れている。「生きている限り、いや死後も泳ぎ続けたい」と語る河合純一が、その歩みを止めることはない。

その目には、いつも夢と希望の光が見えているのだから。